

MIS036-P140

会場:コンベンションホール

時間:5月27日 14:15-16:15

## 東北地方太平洋沖地震に伴う仙台・石巻平野の津波の流動と土地条件 Tsunami flow on the Sendai and Ishinomaki plains in relation to their geo-environment

海津 正倫<sup>1\*</sup>, 北村恭兵<sup>1</sup>, 杉本昌宏<sup>1</sup>, 田村賢哉<sup>1</sup>

Masatomo Umitsu<sup>1\*</sup>, Kyouhei KITAMURA<sup>1</sup>, Masahiro SUGIMOTO<sup>1</sup>, Kenya TAMURA<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 奈良大学

<sup>1</sup>Nara University

本報告では、被災直後の空中写真にもとづいて仙台平野と石巻平野の津波痕跡を把握し、津波の流動を検討した。

仙台平野南部では平野の奥行きが浅く、相対的に地表面の勾配が大きいため、遡上した津波は遡上限界に達したあと、折り返す形でまっすぐに海の方に向けて戻ったと考えられる。これに対して、仙台平野の中部・北部では、平野の地表勾配が緩く、内陸に向けて遡上した津波の流れは折り返してまっすぐに海に戻るのではなく、地表の低い部分を選ぶような形で戻り流れをなしたと考えられる。また、その際に、押し波（遡上波）によって堆積したものをよけて流れた所もあり、内陸に向けた流れの証拠が残された所もある。

一方、石巻平野では海岸に向けてまっすぐに戻る流れはほとんど見られない。

平野西部では、内陸から海に向けて戻る流れがかなりはっきりと見られるが、それらは東～東南東方向に流れており、海岸に対しては斜めに戻る形となっている。さらに、東側の平野中央部にかけての地域では、仙台平野と違って平野の奥でも東西方向、すなわち、遡上限界線に沿うように流れたことが示されている。また、旧北上川の河口付近でも北側（内陸側）への流れが残っているものの、海へと向かう流れはほとんど見られない。これらのことは、内陸へ向けての押し波（遡上流）の流れが極めて強かったのに対し、引き波（戻り流れ）は北上川を通じて海に戻ったのか陸上には強い流れを作らなかったように考えられる。

キーワード: 津波流動, 仙台平野, 石巻平野, 地形, 地形環境

Keywords: Tsunami flow, Sendai Plain, Ishinomaki Plain, Landforms, Geoenvironment